

COMBAT

コンバットマガジン

June, 2019

No.519

6

017

特集

気高き女性たちの詩

女性パイロット 列伝



Cover Photo
via Jay Borman
© WORLD PHOTO PRESS 2019
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

004 **LRRP**
MACV RECONDO SCHOOL
あの世に一番近い学校 by Jay Borman

012 第8回 **サイゴン物語** Saigon Memories
His War Tour in Saigon
ある作家が立ち合った戦いの土地と戦いの時間

053 **月刊 THE グリーンベレー**
GREEN BERET
SYRIA 2016 ●文と写真/DJちゅう

062 **東京マルイ** ●Report by Taku
最新ガスブロ対決
FNX-45タクティカル
VS ハイキャパDOR

068 **WESTERN ARMS**
L.A.ヴィッカーズ・カスタム
《リアルチールVer.》

072 **WESTERN ARMS**
ボブチャウ・スペシャル Ver.1.5
《ビンテージ・エディション》

074 Militaria Roundup!
WWI ドイツ帝国陸軍の軍装 Part 1

080 The Equipments of the U.S. Force
[現用米軍装備カタログ]
'90年代特殊部隊装備特集SOE Part 2

特別編 **セカイの力こぶ** ●写真と文/菊池雅之
090 複合訓練空域 R-2508

094 シン・サバゲ三等兵
祝! 5周年! 僕たちはココでサバゲを教わりました!
PARADOXデルタゲーム5周年祭!

099 **中東最大の軍事見本市**
IDEX 2019

104 サバゲ三等兵APS部 SPECIAL!
ウウ~, バウワウ! 待ってたよ, CA870ブルドッグ!

106 **トイガンニュース**
●WA M4A1《アメリカンスナイパーS-Ver.》
●タナカ S&W M629《PCターゲット・ハンターVer.3》

COMBAT FRONT LINE

- 058 空母とゾンビなシネマ特集
- 060 大阪 グリーンキャニオン 姫祭りイベント開催
- 061 リスクコントロール通信 No.3
- 108 新製品てんこ盛り! COMBAT mono
- 110 コラム ベトナムを遠く離れて——。文/小倉徹
- 111 ゲームOTT『World of Warplanes』
- 112 ツゲチョリ「シューティングバー FIVE」
- 113 USシューティングライフ
- 114 PRESENT
- 125 CIC
- 126 バックナンバー
- 127 奥付&次号予告

特集

米軍の女性航空機パイロット 気高き女性たちの詩



U.S. FORCES
FEMALE PILOT



偏見と無理解というガラスの天井を突き破り、蒼空での戦いを 目指した気高き女性たちがいた。そしてその戦いは今も続く。

米軍女性戦闘機パイロットの草分け、ローズマリー・マロニーが天に召され、
彼女の葬儀の際、1機のスーパーホーネットが彼女を天国へ導くように大空へ向かって急上昇した。
操縦桿を握っていたのはマロニーら先駆者が切り開いた道を着実に、一歩一歩踏みしめ昇っていく女性戦闘機パイロットであった。
文/石川潤一 Photos : USAF, U.S. NAVY, DoD

マリナー大佐 追悼フライオーバー

2月2日、テネシー州メイナードビルの墓地では、65歳で病死したローズマリー・マリナー退役海軍大佐の葬儀が執り行われた。葬儀の栄誉礼として墓所の上空を4機のF/A-18Fスーパーホーネット戦闘攻撃機がフライオーバー（上空通過）、うち3機が水平飛行する中、先頭を飛んでいた編隊長機だけが急上昇、垂直に駆け上がった（次ページ上写真）。これは「ミッシングマン・フォーメーション」と呼ばれ、死者を天国へ導くという意味合いがあった。最近では「パパ」・ブッシュ元大統領やジョン・マケイン上院議員など、パイロット出身の大物政治家の葬儀で実施されたが、大佐級の葬儀で挙行されることはあまりない。しかも、飛行した4機の乗員がすべて女性ということで、一般メディアにも取り上げられ大きな話題となった。

もちろんそれには訳がある。ローズマリー・ブライアント・マリナー大佐は1973年に米海軍が女性パイロットに門戸を開いた際の、第一期生8名のひとりだった。つまり、アメリカにおける女性パイロットの草分け的存在で、海軍としても費用をかけてミッシング（ウー）マン・フライオーバーを執り行なう宣伝効果は充分にあった。

今でこそ、女性の戦闘機パイロットなど珍しい存在ではないが、1970年代に女性パイロットを擁する国はイスラエルくらいで、実戦に参加した女性パイロットとなると、ドイツの侵攻から祖国を守る「大祖国戦争」を国民上げて戦ったソ連の「魔女飛行隊」くらいのものであった。アメリカにもアメリカ・イヤハートやジャクリヌ・コ克蘭など女性のパイロットはいたが、記録飛行や新型機のテストを行なう「特異な存在」で、兵士としてのパイロットではなかった。

そのような気風を打ち破ったのがローズマリー・マリナーやこれから紹介する女性パイロット達だ。

フライオーバーした4機は複座のF/A-18Fで、パイロット（海軍ではアビエータと呼ぶ）と後席のWSO（ウエポンシステム士官）はバージニア州オシアナ海軍航空基地所属部隊から選抜された。指揮官はVFA-32（第32戦闘攻撃飛行隊）の飛行隊長、ステーション・コレヒト中佐で、VFA-213副司令レスリー・ミンツ中佐、VFA-32のページ・ブロック中佐、VFA-106のダニエル・シリョット少佐が操縦、オシアナ基地所属のジュニアフェー・タリス大尉、VFA-81のアマンダ・リー大尉、大西洋艦隊戦闘攻撃兵器学校のエミリー・リクシー大尉が後席に搭乗し

た。また、フライトに欠かせない地上クルーも約半分の20数名が女性だった。

米海軍は1973年3月2日、当時のジョン・ウォーナー海軍長官（1972～1974年）は、女性の飛行任務を妨げてきた規制を撤廃し、8名の女性がフロリダ州ベンサコラ海軍航空基地でパイロット訓練を受けることになった。訓練を修了すると胸に金色の翼章、「ウイング・オブ・ゴールド」を付けることが許されるが、74年2月22日、最初に翼章を授与されたのがバーバラ・アレン・レイニーで、海軍最初の女性アビエータとなった。続いてジュディス・ニューファーム、アナ・マリナー・フーカ、そしてローズマリー・マリナーが厳しい訓練を突破した。

しかし、彼女らに与えられた任務は輸送機の操縦で、たとえばレイニーはカリフォルニア州アラミダ海軍基地のVR-30（第30輸送飛行隊）でC-1AトレーダーやCT-39Eセイバーライナーを操縦した。1977年11月、懐妊を機に予備役となったが、ダグラスDC-6輸送機と海軍バージョン、C-118Bリフトマスターを操縦し続けた。

1980年代になると経験ある教官パイロットが不足、レイニーはフロリダ州ウィットニングフィールドへ赴任、VT-3（第3訓練飛行隊）でT-34Cターボメンターのエミリー・リクシー大尉が後席に搭乗し

た。また、フライトに欠かせない地上クルーも約半分の20数名が女性だった。米海軍は1973年3月2日、当時のジョン・ウォーナー海軍長官（1972～1974年）は、女性の飛行任務を妨げてきた規制を撤廃し、8名の女性がフロリダ州ベンサコラ海軍航空基地でパイロット訓練を受けることになった。訓練を修了すると胸に金色の翼章、「ウイング・オブ・ゴールド」を付けることが許されるが、74年2月22日、最初に翼章を授与されたのがバーバラ・アレン・レイニーで、海軍最初の女性アビエータとなった。続いてジュディス・ニューファーム、アナ・マリナー・フーカ、そしてローズマリー・マリナーが厳しい訓練を突破した。

1974年に「ウイング・オブ・ゴールド」を得たローズマリー・マリナーも最初の1年間はプロペラ機のパイロットで、オシアナ基地のVC-2（第2混成飛行隊）においてS-2トラッカー対潜機の操縦を任された。対潜機といっても実際に潜水艦狩りをするわけではなく、対潜機材を外して人員や軽貨物を輸送する機体であった。しかし、マリナーがレイニーに比べて恵まれていたのは、同じ飛行隊にA-4C/ESスカイホーク軽攻撃機が所属していたことで、比較的スムーズに作戦機へ移行できた。もちろん、当時は女性の実戦参加は認められておらず、スカイホークは演習などでアドバサリー（仮想敵）を務めたり、標的を曳航することが任務であった。

A-4からその後継機であるA-7Eコルセア軽攻撃機に転換したマリナーは、1982年には女性として初めて、空母レキシントンでの訓練を実施、TA-4Jスカイホーク練習機で17回の「トラップ」を行なっている。トラップというには空母の飛行甲板に張られたアレスティングワイヤを機体尾部のフックで引っかけて着艦することで、「コントロールクラッシュ」（制御された



LRRP

MACVリーコンドール記章は矢じりをモチーフとしたデザインで、中にRECONDOとVの文字がある。リーコンドール課程に臨む兵士は教官からこの記章について「下向きの矢じりは空からの侵入、白と黒のツートンカラーは昼夜を問わない行動、VはValor(勇気)とVietnamを表している」と教えられ、さらに「所属部隊で教わった事はすべて忘れる」とシンプルかつ明確なアドバイスを受けた。



PT (Physical Training=体力養成)の腕立て伏せを行う受講生に鋭い視線を送っているのは、教官とフィールドアドバイザーを務めるカシマル・J・スコット1等軍曹。埃まみれのタイガーストライプ迷彩服ときれいなジャングルファティークが実に対照的である。迷彩服の左胸に見えるのは、受講生を示すハンガーパッチだろうか。1969年3月11日。

マクヴィーリーコンドールスクール

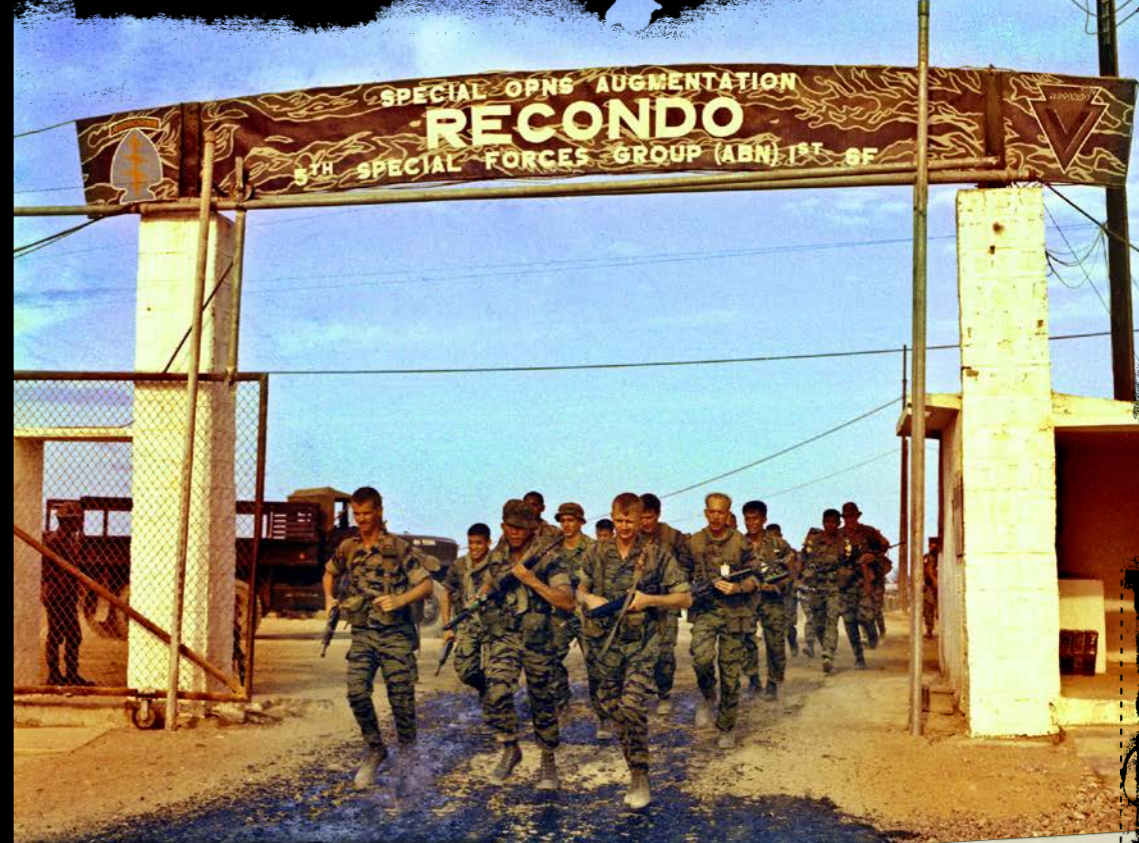
MACV RECONDO SCHOOL

あの世に一番近い学校

ベトナムでLRRPと呼ばれた部隊はその名の由来であるLong Range Reconnaissance Patrol=長距離偵察任務の他にも敵の攪乱や破壊工作、ハンターキラー任務など幅広い任務に従事していた。彼らの活躍ぶりは半ば伝説と化しているが、全貌は未だに掴みきれず、LRRP隊員の多くがその技能と戦術を培ったニャチャンのゲリラ戦専門学校、MACVリーコンドールスクールについて知る機会はずっと少ない。短期習得型でありながら実践的かつ危険度の高いカリキュラムで「あの世に一番近い学校」と呼ばれたスクールの姿に迫る特別編。

by Jay Borman 構成/鈴木健太郎 コーディネート/河村喜代子

敵地での偵察や奇襲を専門とする小部隊を歩兵師団の指揮下に置くというコンセプトは、アメリカがベトナムに本格介入するはるか以前からウエストモラント将軍によって提唱されており、訓練施設のルーツは1958年に彼が師団長を務める第101空挺師団内に創設されたリーコンドールスクールにさかのぼる。リーコンドールとはReconnaissance Commando Doughboy=偵察コマンド歩兵の略で、スクールでは少人数での偵察、破壊、サバイバルなどの技術を2週間で身につけるカリキュラムが組まれていたのだが、ベトナム戦争が本格化してゲリラ戦の即戦力となる兵士が不足し、LRRPの重要性が認知されると、MACV(南ベトナム軍事援助司令部)の司令官となっていたウエストモラント将軍は、ニャチャンの第5特殊部隊グループB-52分遣隊(プロジェクトデルタ)が1965年9月に開設していたLRRPスクールの設備と人員を拡大する形で1966年9月にMACVリーコンドールスクールを発足させた。スクールに入学するには、本人の志願であること・戦闘職種であること・極めて健康であること・ベトナムで1ヵ月以上の経験があること・ベトナムでの任期が6ヵ月以上残っていること・LRRPに配属されていた、あるいは配属される予定の者・軍事全般に秀でている者のすべての条件を満たす必要があり、3週間(310.5時間)からなるカリキュラムは、体力養成(10時間)、地図判読(16時間)、医療(6時間)、通信(10時間)、武器の習熟(6.5時間)など10を超える項目があったのだが、特筆すべきは戦技実習(118時間)で、全体の4割近い時間が実習に割り当てられているなどかなり実戦を意識した内容だった。特殊部隊員の指導により高度な技術と短期習得を両立させた訓練は最初の1週間で基礎体力を身につけ、2週間にヘリを使ったラベリングや緊急脱出の方法を学ぶとすかさずFTX(Field Training eXercise=野外訓練)へ向かうなど慌ただしく進み、3週間目には訓練の総仕上げとして“YOU BET YOUR LIFE”(お前の命を賭ける)と呼ばれるLRRP実習があったのだが、敵の動きが活発な地域で行なわれたこの実習は非常に危険で、受講生や教官が命を落とす例もあったと言われている。南ベトナム軍や韓国軍、オーストラリア軍などからも受講生を受け入れるというオープンな面があった一方で、受講生のおよそ3分の1が脱落するという激しい訓練からDeadliest School on Earth「あの世に一番近い学校」の異名を持ったMACVリーコンドールスクールは1971年2月に活動を停止するまで82クラスを指導し、3,740名が訓練を生き延びた証としてリーコンドール記章の着用を許された。



スクールの門をくぐってPTの持久走に向かう受講生たち。30ポンド(13.5キロ)のリュックを背負った完全軍装で7マイル(11.2キロ)の距離を走るこの訓練は、「極めて健康」なリーコンドール受講生の多くが表情をゆがめ、早くも脱落者が現れる。タイガーストライプ迷彩に彩られた迫力満点の看板はまるでこのスクールの厳しさを物語っているようだ。1969年3月15日。



ゴムボートを使った水路での侵入訓練。水辺を想定した訓練では武器や装備を濡らさずに運ぶ方法も学ぶ。

訓練の後は食事をしながら教官とのデブリーフィング(報告会)が行なわれ、まったく気が休まる暇がない。少しの不注意や準備不足でも即退学となるこのスクールでは、レンジャー資格を持つ受講生からも脱落者が続出した。



ロープや綱ばしごを備えた降下塔は高さが40フィート(12メートル)あり、完全軍装で行う昇降訓練は危険だったが、刺激的な内容で受講生に人気があった。



MACVリーコンドールスクールのカリキュラム一覧。知力、体力ともに高いレベルが要求されるこのスクールで受講生が最も手こずった科目はMap Reading(地図判読)だったらしい。

PROGRAM OF INSTRUCTION	
SUBJECT	SCORE
Administration	10.5
Physical Training	10.0
Map Reading	16.0
Medical	10.0
Communications	10.0
Intelligence	11.0
Patrol Training	14.0
Weapons Training	10.5
Air Operations	10.0
Combat Operations	10.0
Disorientation & Certificates	10.0
Commander's Time	10.0
TOTAL	100.0



第8回

サイゴン物語 Saigon Memories

ある作家が立ち合った戦いの土地と戦いの時間 —サイゴン マジェスティックホテル—

黄色はベトナムの民族の9割、つまり大多数を占めるキン族の誇りを示すシンボルカラーである。あの時代、マジェスティックホテル正面には、黄底三線旗(こうていさんせんき)が掲げられていた。ベトナムが南北に分かれて戦っている時代は、この旗は自由主義の象徴だった。1975年4月30日にサイゴンが陥落してから以降は、黄底三線旗を掲げることは禁止された。

文/コンバットマガジン編集部 Text/CM Editorial Staff
写真/今井今朝春、WPPコレクション Photo/Kesaharu Imai, WPP Collection



作家、開高健は1964年11月から100日間、ベトナムにいた。12月生まれ作家は、その間に33歳から34歳になっている。若い。ちょうどその頃の日本は、東京オリンピックを終えた直後にあたる。第2次世界大戦後はじめて、アジアで開催された大会を成功裡に終えて、ほっとしたり、世界の仲間に戻った自信を取り戻したかのような気分になっていた時代である。

作家は、ベトナムにいた間、「週刊朝日」に毎週、原稿を送った。「ベトナム戦記」には、当時の日々が記されている。鉄兜をかぶって戦場のただ中に出て行く。頭を守ってくれているヘルメットの金属の薄さに驚き、豆腐のような自分の頭をなで、木の根方に背中をあずけて戦争を見ている。もちろん作家にとっての戦争は、人間のかたちをしていることはすぐに伝わってくる。ベトナム人を簡単には非難しない。アメリカ人も同様だ。中学生のような体躯をしたベトナム人の兵士と、毛むくじゃらで、ベトナム人より数倍立派な身体つきのアメリカ人の兵隊たちを見ている。そしてなにより、作家自身を見つめている。視線はフラットで偏りが無い。なにより肉体を通して見ているのがいいと思うのだ。ズルのしようがない。

マジェスティックホテル103号室が作家がベトナムに滞在中に泊まった部屋だった。3晩4日にわたって、サマックという地区のジャングルで死と隣り合わせでいたところから、ホテルに戻ってきた時の姿と思われる。2枚とも写真提供 朝日新聞社



戦いのさなかにあった時代でも、マジェスティックホテルのカクテルラウンジであるMバーはオープンしていた。ベトナム戦争後は、サイゴンツーリストが運営する国営5星ホテルになった。

His War Tour in Saigon

●撮影協力：サバイバルゲームフィールド&シューティングレンジMMS
住所 東京都新宿区北新宿4-1-9-B1
☎03-6304-0539
URL : <http://mms-typed.com/>

ジャパンスティールチャレンジのステージの一つであるラウンドアバウトで実射テストを行った。今回、取材に協力いただいたのは、大久保にあるインドア施設「MMS」。インドアサバイバルゲームからスピードシューティングのマッチや練習会など、トイガン関連のイベントを幅広く行っている。

東京マルイ Photo&Text by Taku
東京マルイ ☎03-3605-3312
<http://www.tokyo-marui.co.jp/>

最新ガスブロ対決 FNX-45タクティカル VS Hi-CAPA D.O.R

東京マルイから比較的短いスパンでタイプの異なる2機種が発表となる。1挺目が4月19日に発売されたばかりの「Hi-CAPA D.O.R」。そして2挺目が「FNX-45 TACTICAL」だ。どちらも.45口径のハイキャパシューターモデルだが、根本的なコンセ

2挺の異なったタイプのガスブローバックハンドガンの実力を検証!!

プトが異なる。Hi-CAPA D.O.Rがスピードシューティングやタクティカルシューティングでの使用を想定してデザインされたモデルなのに対し、FNX-45はミリタリー向けに考えられたバリバリのコンパクト・ピストルなのだ。

Hi-CAPA D.O.Rは射撃競技向けにデザインされているという事もあ

り、全体的に洗練されたスタイルだが、FNX-45はサイレンサー装着可能なバレルやウェポンマウントといった、ミリタリーで求められるコンパクトピストルとしての機能性の高さが伺える。どちらのモデルもそれぞれに魅力的なフォルムなので、どちらを選ぶかは好みの別れるところ

だろう。

そこで、今回はこの個性的な2挺のモデルを、“外観”“機能性”“実射性能”の3点から検証してみる事にした。個人的な好みも交えつつ(笑)、客観的に双方の良い点、悪い点について解説していきたい。

【Hi-CAPA D.O.R】

ハイキャパ・シリーズの最新作となるHi-CAPA D.O.Rはグリップやシャーシこそ従来の5.1のものが流用されているが、それ以外の部分はほぼ新規設計されており、見た目の印象はかなり変わった。スライド上面にはフルート加工が施され、スライド側面前後には滑り止めのための

セレーションが刻まれるなど、よりレーシーな雰囲気を醸し出している。さらにスライド後部には、マイクロプロサイト搭載時にも指の掛かりを良くするためのスライドプル・サポートリブ(突起)を設けるなど、機能性の向上も意識したデザインとなっている。もちろんデザインだけでなく、内部メカニズムにも大きく手

が加えられているのは言うまでもない。新型ピストンを採用したブローバックエンジンは、マイクロプロサイトを搭載してもその影響を受ける事なく迫力のリコイルを味わう事が出来る。他にもM45A1で搭載されたショートリコイルシステムを採用するなど、実用性を重視したメカ

ニズムとなっているのだ。

操作感については、フラットタイプのショートトリガーやロングスライドストップ・レバーを採用するなど、5.1からは大きな差はないが、使いやすさは確実に向上している。特にフラットタイプのショートトリガーは手の小さな人にも扱いやすい。真ん中部分にスリットが入っていて



Hi-CAPA D.O.R
●全長:220mm
●重量:839g
●装弾数:31+1発
●価格:17,064円

5.1を洗練し、よりシューティングに特化したデザインに仕上げられている。こちらも実用性・機能性を併せ持ったモデルだ。

FNX-45 タクティカル
●全長:220mm
●重量:830g
●装弾数:29+1発
●価格未定

異なった色調のタンカラーで素材による色の違いを見事に再現している。実用性と機能性が集約されたコンパクトピストルである。



Militaria Roundup!

Part.1

WWI ドイツ帝国陸軍の軍装

2014~18年は第1次世界大戦(WWI)100周年にあたり、ミリタリアの分野でも当時の各国軍装の複製版が続々とリリースされて現在に至っている。日本もWWIでは青島攻略や地中海における船団護衛任務で活躍したが、主戦場から離れていたため今一つ印象が薄いのも事実。そこで今回はわが国にも徐々に増えてきた複製版を紹介しつつ、WWIドイツ軍の軍装と関連情報をお伝えしよう。

●解説：菊月俊之 ●写真：青木健格

撮影協力：サムズミリタリ屋 ☎03-3971-4935 (http://www.sams-militariya.com/)

ドイツ統一への道

まず本題に入る前に第1次世界大戦に至るまでのドイツを簡単に追ってみよう。アドルフ・ヒトラー率いるナチス・ドイツは“第3帝国(Drittes Reich)”と自称したが、これは神聖ローマ帝国(800~1806年)、ドイツ帝国(1871~1918年)に続く3番目の帝国という意味だ。現在はヨーロッパの経済大国として知られるドイツだが、統一国家となったのは1871年で、案外遅い(イタリア統一は1861年)。17世紀当時約300の領邦の集合体に過ぎず、19世紀のナポレオン戦争後のウィーン体制で35の君主国と4つの自由都市に再編された。ドイツ統一の機運が高まるのは1830年代だが、話し合いによる統一は失敗。そして北部ドイツのプロイセン王国が自国中心の統一を目指

との合体交渉が行なわれ、全ドイツ連邦の創設が決定された。そして連邦は「帝国(Reich)」に、連邦主席は「皇帝(Kaiser)」となり、1871年1月1日にドイツ帝国(Deutsches Reich)が発足。1月18日にフランスのヴェルサイユ宮殿の間で皇帝即位布告式(戴冠式)が行なわれた。ドイツ帝国は22の君主国(4王国、6大公国、4公国、8侯国)と3自由市を加えた計25の邦国と、普仏戦争後に帝国直轄領となったエルザス・ロートリンゲンで構成される連邦国家だった。このため陸軍省と参謀本部はそれぞれの王国に属したが、その最高司令官はドイツ皇帝(プロイセン国王)とされた。これはプロイセンがドイツ帝国の3分の2を占める大国だったのが理由で、ドイツ統一もプロイセンの軍事力で達成されたという背景があった。そしてプロイセ

ンは多正面作戦のための戦略を立案する。これが“シュリーフェン・プラン”と呼ばれるもので、最初に全力を挙げて6週間以内にフランス軍を撃破し、その後ロシア軍と戦うという壮大なものだった。また多くの国と民族で構成されるバルカン半島では紛争が絶えなかったが、さらにはオーストリア・ハンガリーとロシアが支配権を巡って対立。バルカン半島は「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれるようになる。そして1914年6月28日にセルビアのサラエボでオーストリア・ハンガリー皇太子夫妻が暗殺される事件が発生。オーストリア・ハンガリーは7月28日セルビアに宣戦布告を行なうが、その翌日にロシアは総動員を開始。そしてドイツが8月1日にロシアに宣戦布告したが、これはフランスとの戦争を意味する。ドイツは8月1日にルクセンブルク、3日には中立国ベルギーに侵攻したが、これに対しイギリスがドイツに宣戦を布告。こうしてヨーロッパは第1次世界大戦へと突入していく。



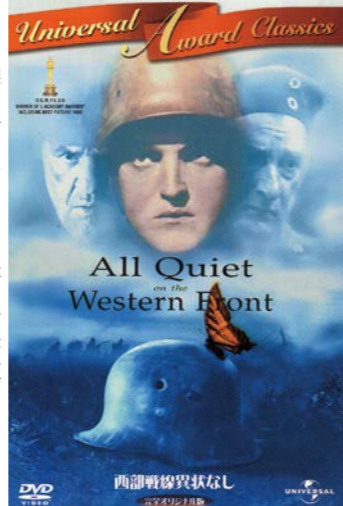
ドイツ統一戦争

19世紀初めのドイツはさまざまな国に分かれており、農業国から工業国として発展する事は不可能だった。そこでドイツ民族統一の機運が高まったが、それには隣国からの干渉を排除する必要があった。そこで発生したのが①デンマーク戦争、②普墺戦争、③普仏戦争で、これら3つの戦争を「統一戦争」と呼ぶ。図版は普墺戦争におけるプロイセン軍を描いたもので、兵士たちが被っているのがドイツ(プロイセン)陸軍を象徴する軍帽の“ピッケルハウベ”。



第1次世界大戦勃発

1914年8月、進撃する西部戦線のドイツ軍歩兵。第1次世界大戦の初戦でドイツ軍は中立国ベルギーを通過してフランスに侵攻。9月初めにはパリに迫るがフランス軍の反撃によって撃退され、以後戦争は塹壕戦へと移行。戦線は膠着し、以後この状態が18年11月11日の休戦まで続く事になる。



映画「西部戦線異状なし」第1次世界大戦を描いた戦争映画はそれほど多くないが、その中でもっとも有名な作品が1930年製作のアメリカ映画「西部戦線異状なし」だ。この作品は志願兵としてドイツ軍に入隊し、第1次世界大戦を戦ったエーリヒ・マリア・レマルクの同名小説の映画化で、第1次世界大戦の様相をリアルに描いているほか、ドイツ軍兵士のユニフォームや装備なども細かく再現(一部は実物を使用している)。WWIドイツ軍のビジュアル資料にもなり、興味のある方は必見だ。本作品は戦前の日本でも公開されたが、反戦的として大幅にカットされている。戦後の65年に完全オリジナル版がリバイバル公開されたが、TV放映や自主上映および廉価版DVDはカット版。ちなみに本作は完全版も販売されているので、観るならばこちらがお勧め。



ドイツ帝国の誕生

1871年1月18日、ヴェルサイユ宮殿の間で開催されたドイツ皇帝戴冠式。図版はアントン・フォン・ヴェルナーが描いた「ドイツ帝国の成立」で壇上右から2人目がドイツ皇帝となったプロイセン国王のヴィルヘルム1世。画面中央の白服の人物がドイツ統一の立役者となった首相のヘルベルト・フォン・ビスマルク。この時点でフランスとの戦争は継続中で、式の最中も砲声が聞こえたという。普仏戦争は1月28日に終結し、ドイツは賠償金50億フランとエルザス・ロートリンゲン(アルザス・ロレーヌ)を獲得している。

す事になる。ドイツ統一の立役者がプロイセン国王ウィルヘルム1世、首相ビスマルク、参謀総長ヘルムート・フォン・モルトケの3人で、ビスマルクは武力による統一を目指し、その障害となる隣国の干渉排除を狙った。その過程で発生したのがデンマーク戦争(1864年)、普墺戦争(プロイセン・オーストリア/1866年)、そして普仏戦争(プロイセン・フランス/1870~71年)で、これら3つの戦争は「統一戦争」と呼ばれる。

ドイツ帝国の誕生

普仏戦争中にプロイセンを中核とする北部ドイツ連邦と南ドイツ4国(ヘッセン、バーデン、ヴュルテンベルク、バイエルン)

連邦が事実上のドイツ陸軍となっていく。第1次世界大戦の勃発 19世紀末には産業の発達によって生産過剰状態が常態化し、これが結果として不況の原因となった。そこでヨーロッパ各国は植民地を獲得しようとしたが、それは国家間の対立を招いた。そしてドイツはオーストリア・ハンガリー、イタリアと三国同盟を結び、イギリスはフランス、ロシアと三国協約を結んだ。ドイツは1898年に制定した「艦隊法」で大規模な軍艦建造に着手しており、三国協約はイギリスがドイツの脅威に対抗する目的があった。この結果、ドイツはフランスとロシアに挟み撃ちにされる危険が生じ、ドイツ参謀本部のフォン・シュリーフェ

ピッケルハウベ/PICKELHAUBE

第1次世界大戦初期のドイツ陸軍、そしてドイツ帝国のシンボリック的存在として知られるピッケルハウベ(鶴嘴付きヘルメット)。これは1842年10月23日にプロイセンの王室内閣命令によって導入されたもので、本来はプロイセン王国の軍帽だった。デザインは国王フリードリヒ・ウィルヘルム4世(在位1840~61年)で、ドイツ統一後にほかの王国の順次導入している。ピッケルハウベは採用から廃止までに約10タイプが存在しており、第1次世界大戦勃発当時のものは、①1895年型、②1905年型、③1914年代用(Ersatz)型、④1915年型の4種類だった。

ヘルメットは革製で、シェル(ヘルメット本体)と前後バイザーの3つのパーツで構成。革は南米アルゼンチンからの輸入品だった。これに真鍮製のピッケル(英語ではスパイク)と装飾金具が付く。ちなみにピッケルは基本的に歩兵用で、砲兵は砲弾を模したボール形の頂飾りを付けており、“クゲルヘルム(Kugelhelm: 球付きヘルメット)”と呼ばれた。ただし、バイエルン砲兵は1915年まで歩兵と同じピッケルハウベを着用している。また槍騎兵(ウーラン)は“チャプカ(Tchapka)”と呼ばれるタイプを着用したが、これは頂飾りがポーランド槍騎兵の軍帽(チャプカ)を模した形となっていた。

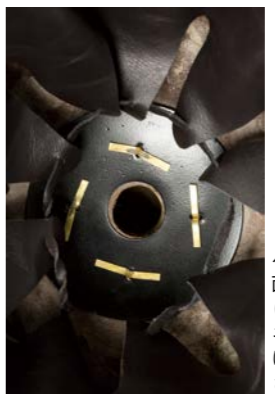
1871年の普仏戦争におけるプロイセンの圧倒的勝利は各国軍に大きな印象を与え、イギリスやアメリカなど複数の国がピッケルハウベを自軍のヘッドギアとして採用。また南米チリの軍旗衛兵(カラー・ガード)は現在もピッケルハウベを着用している。



頂部に取り付けられたピッケル(角)が独特のムードを持つピッケルハウベ。採用から第1次世界大戦で廃止されるまでに10種類のバリエーションが存在するが、現在発売中の複製版は第1次世界大戦勃発時の制式だったM1895。実物通り本体に革を使用した本格的な高級品で、正面のワッペンは、①プロイセン、②バイエルン(写真)、③ヘッセン、④ヴュルテンベルク、⑤バーデンの5種類から選択できる。(撮影協力：サムズミリタリ屋/ピッケルハウベ(バイエルン兵・下士官用) /価格23,800円)



ヘルメット内装 ヘルメット内装はヘッドバンド(サイズに合わせてヘルメットを頭部に安定させる)とハンモック(ヘルメットを安定させ衝撃を分散・減少させる)が一体になった革製。ハンモックに通した紐で深さを調節する。 ヘルメット背面の補強金具(スパイン)はネックガードにネジで固定されている。



1900年の義和団事件に派遣されたドイツ陸軍兵士。ダークブルーの制服上下にピッケルハウベを着用している。ちなみに事件の際にドイツ軍の主力となったのは海軍で、陸軍は到着が遅かったため事件後の治安維持が主任務だった。